

歴史を語りながら未来を示唆する

— 書評：柳田良造著

『北海道開拓の空間計画』

北海道大学出版会（¥16,000＋税）

本書は近代北海道の地域空間形成のルーツを探りながら、日本のこれからの地域づくりのあり方を鮮やかに示唆している。読みすすむとワクワクする。何故ならば、現代社会は空間に関わるいくつかの対立を不問にしているところから、人々の生きにくさと地域の乱れが目立っているが、著者は自然空間と人工空間、多様空間と標準空間、私的空間と公的空間、余暇空間と労働空間等の対立を超えて、次のような創造的融合の方法を解明しているからである。

●自然空間と人工空間の統合

本書全体を貫くキーワードの1つは「基層」である。「地域空間は、人間が居住した歴史と痕跡が集積した場であり、固有の地形や植生を基に、様々な時代の生活や土地に関する人間の働きが堆積している」が、その構造を規定する重要な役割を果たすレイヤーを「基層」と定義し、北海道開拓過程を、「基層」の自然空間と、「計画とデザイン」による人工空間の場所に応じた統合ととらえている。今日私たちがかの地を旅する時に、山並みと防風林と幾何学的に区切られた畑の雄大にして穏やかな風景の形成原理を本書は明るみにしている。

●多様空間と標準空間の結合

明治6年に始まった屯田兵村は多様であり、

同23年に実施された殖民区画制度は標準化である。前者は全体で7ha余りと面積的に少ないが、37兵村全て個性的である。後者は110haと広大で北海道の耕地面積の大半を占める300間(540m)四方のモジュールで標準的である。いづれにも「よりしろ」のデザイン手法が活用された。「よりしろ」とは、「よりどころ」と「代(しろ：何かのためにとっておく部分)」で構成される概念である。それは立地する場所の軸線や地形、微地形としての湧水地、大樹のシンボル性、道路と家々の間の縁空間、防風林や果樹で生み出す領域性など、多様な空間化の手法のことを指す。屯田兵村には多様な「よりしろ」を使いこなし個性的風景を、殖民区画には「基層」的「よりしろ」を駆使し場所に顔を与えた。標準システムが横行する現代の地域づくりに「よりしろ」の手法は是非活用したい。

●私的空間と公的空間、余暇空間と労働空間の対立を超える

殖民区画制度による入植地には、営農上のメリットが大きい農地中心の疎居制が一般的であった。新渡戸稲造は近隣関係育みの観点から、住居中心の密居制と24戸の小集団単位の配置計画を提案した。条里空間の中で生産性優位と固有性の排除を超えて、新渡戸は人々は相互関係に住むことを通して、生活と生産、私と公を有機的に統合できる方向を示した。その実現事例を見ることはなかったが、このことは今日もわが国の住宅地計画の試金石である。

本書をプランナー、デザイナー、行政職員、一般市民等多くの方々に薦めたい。

延藤安弘（NPO法人まちの縁側育くみ隊 代表理事）